



Title	立原道造：時を告げる建築：「図書館」設計図にみる建築思考と詩的世界
Author(s)	岡本， 紀子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2018, 52, p. 103-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76092
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

立原道造：時を告げる建築

——「図書館」設計図にみる建築思考と詩的世界——

岡本紀子

キーワード：公共建築／図書館／設計図分析／鐘塔／立原道造

あたたかい香りがみちて 空から
花を播き散らす少女の天使の掌が
雲のやうにやはらかに 覗いてみた
おまへは僕に凭れかかりうつとりとそれを眺めてみた

立原道造：虹の輪「夏への四つのプレリュウド」から

はじめに

日本におけるモダニズム建築の潮流は、1920年から30年代にかけての様々な建築運動において形成されたと見られる。その嚆矢とされる分離派建築会は建築の芸術性を重視し、建築作品の展覧会を開いて作品集を出版することにより新しい建築の理念を提起した。しかし1928年に分離派建築会の活動が停止し、建築運動にリアリティの高まりが求められる30年代に入ると、合理主義に基づく西欧のモダニズム建築の受容が加速し、機能主義的な建築観が広く普及して行った。

東京帝国大学（以下、東大）建築学科においても、機能主義に基づく建築思想に心酔し、ル・コルビュジエ（1887～1965）の斬新な設計に影響を受ける学生が多いなか、そうした時流や方向性に対して型にはまらない独自の設計を試行する一人の学生がいた。1934年、建築学科に入学すると同時に、詩人堀辰雄、三好達治らが立ち上げた第二次『四季』に同人として参加し、詩人としても活躍した立原道造（1914～1939）である。上に引用した詩、『虹

の輪「夏への四つのプレリュウド」から』（以下、「虹の輪」）は、最終学年である3年次の1936年8月、『文芸汎論』に発表されたソネット（14行詩）の第一連である。前年の夏、立原は軽井沢・追分で個性的な4人の女性と出会い、それぞれに淡い恋心を抱き、詩や物語のインスピレーションに繋がったという経験がある。学生最後の夏期休暇を間近に控え、彼女らとの再会を秘かに期待する心の高鳴りが、^{プレリュード}前奏曲としての詩篇を生んだのかもしれない¹⁾。その詩作は、おそらく学期末の課題である「図書館」の設計と同時期に行われていたのではないかと推察される。同年の春先に、立原は親友への手紙に「僕の分身は、かうして日夜、ひとりの僕が、文学の道に生きています、おなじ熱量で、建築の道に生きています」と書いている²⁾。常に《詩と建築》を自身の身体に内在させていた立原にとって、「虹の輪」の詩作と「図書館」設計とのあいだに、ある種のイメージの共有があったとしても不思議ではない。そのような印象を与えるほど、水彩絵具で描かれた「図書館」の透視図は、外観を伝えるという以上に詩的世界を感じさせるからである。

設計課題「図書館」は、地下1階、地上3階建の国立図書館として構想されている。その外観は、一見すると北欧のナショナル・ロマンティシズムの代表的建築といわれるストックホルム市庁舎（1923）を想起させるが、所々にモダニズム建築の手法も見受けられる。館内には閲覧室、書庫、目録室といった図書館に必須の機能だけでなく、来館者や職員にとって居心地の良い空間を創出するための工夫が凝らされている点も注目に値する。「図書館」設計図は、立原の建築関係の資料としては珍しく全9枚が現存している。また最初期に構想された図書館のスケッチや平面図などから推敲の軌跡を見ることが可能である。本稿ではそれらの資料をもとに「図書館」設計図の分析を試み、同時に独特の雰囲気を出している外観透視図等に立原の詩的世界の読解を試みたい。建築設計と詩的イメージの双方向から考察することで図書館構想の意図を明らかにするとともに、概して住居建築を得意とする建築家、あるいは田園志向の建築家として評価されている立原の、新たな一面を解き明かすことが出来るのではないかと考える。

1. 公共建築への視座

当時の東大建築学科では「建築計画及び設計製図」の授業がカリキュラムの中心をなしていた。立原が在籍した1934～36年度の設計製図の課題の中から公共性のある建築をテーマにしたものを拾い上げると、「小学校」、「サナトリウム」、「美術館」、「デパートメント・ストア」、「ホテル」、「図書館」、「オリンピック装飾塔」、「新橋駅」など、公共建造物の基本となるものや社会的催事などの時流に合った課題が出されているのが解る³⁾。東大建築学科では毎年、前年度の優秀な設計伎倆を有する学生に対して辰野賞が授与される。立原は一般に住居建築を得意とする建築家のイメージが持たれているが、1年次の「小住宅」に続き、2年次では「デパートメント・ストア」、3年次では卒業設計「芸術家コロニイの建築群」において、その独自のアイデアと製図の美しさにより、3年連続での辰野賞を受けている。そうした点からも、住居建築だけでなく公共建築にも高い意識と関心を持っていた事を知ることが出来る。

1936年5月頃、大学3年の立原は初めての評論的随想「住宅・エッセイ」を執筆した⁴⁾。この文章は立原にとって「極めて切実なふたつの要素」⁵⁾としての、建築（住宅）の設計と文章（エッセイ）を書くことが、自身の内に等価に存在すると綴った随想で、「住宅する精神」と「エッセイする精神」は『人生』ダス・レエベンに喩えて語られている。その冒頭は建築を三つに区分——「住居建築と、公共建築、或は記念建築と、産業建築と」——されるところから始まる。「公共建築、或は記念建築」については、「図書館・美術館・音楽堂・劇場・公会堂・市庁舎・議事堂・百貨店等、更には銅像の台座・公園の涼亭などに至るまで、すべて住居建築以外の建築である」と定義する一文があり、それらは住居建築のように「人間の生活に切実に密着することが要求」されるよりも、「純粹造型美術」に位置すると言及されている。つまり、住居建築が「人生的」であるのに対して、公共建築は「美学的」であるとし、後者の建築に関しては「建築美学に於ていちばん興味もあり且つ実も多い研究を

すること」だと述べており、立原が公共建築に対して、住居建築とは別趣の魅力を感じていることが読みとれる。

2. 書簡にみる初期図書館案

大学3年の立原は設計の課題と並行して、文学活動では詩誌『四季』を中心に、友人らと創刊した同人誌『未成年』、宝塚歌劇団の出版する『ゆめみこ』、文芸同人雑誌『文芸汎論』等に継続して詩や物語を発表していた。多忙を窮めながらも、手紙は頻繁に書いていた。立原にとって書簡は、しばしば自らの内に芽生えた詩や設計のイメージの発露として記されるからである。

6月中頃、立原は友人3人に自身の図書館構想の絵を添えた書簡を送付している。建築学科の友人柴岡玄佐雄と小場晴夫への封書消印は13日、浦和在住の詩人神保光太郎宛は翌14日となっている。それらは「図書館」のイメージが確定したことを無邪気に知らせる手紙のように見受けられるが、以降の設計に変更点が多いことからすると、設計への契機として描かれたスケッチと理解されるべきであろう。それらには「建築・エッセイ」で言及されていた公共建築における「建築美学」のテーマが顕著に表れていると見ることも出来る。

6月13日の柴岡宛には「こんなエレベーションはどう？ 塔のデザインの勉強になる。—— hm! ——それから入口、ホールあたりの勉強をする」という文面に建物の墨絵が添えられていたという⁶⁾。

本章では13日の小場宛書簡と14日の神保宛書簡に書かれた文章とスケッチを分析の対象として考察したい。まずはそれらの書簡を以下に引用する。

・図書館のことをすこし考へはじめた————この張り出しのところを一しよう懸命にデザインする。(図1)塔はエストベルクの塔に習つて作る。入口ホールもエストベルクを学ぶ。どうぢや？傑作？(小場宛)

・このごろ、図書館を設計してあります。学校勉強です。(図2) この絵のやうなデザインはどうですか? / この図書館の設計図を描きあげると夏休みになります。(神保宛)

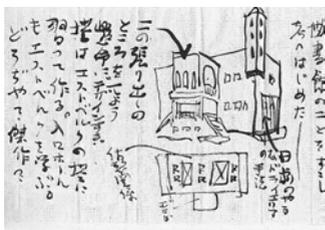


図1 図書館スケッチ：小場宛書簡より



図2 図書館スケッチ：神保宛書簡より

小場への手紙では、「エストベルクの塔」「入口ホールもエストベルク」という言葉が印象的である。「エストベルク」すなわち、ラグナル・エストベリ（1866～1945）はスウェーデンの建築家で、代表作にストックホルム特許局（1921）（図4）、ストックホルム市庁舎（1923）（図8）などの作品がある。立原が描いたバルコニーへのアプローチは、特許局の階段に近い印象だが、バルコニーの形状は異なる上に、特許局の玄関には花崗岩のカリアティードが飾られるなど古典的な様式が強いといえる。設計の最初期は、立原の持論である公共建築における「美学的」観点から古典主義様式のディテールに意識を傾け、そのなかから踏襲すべき意匠として抽出されたのが通路からバルコニーを経由する入口部分であったのではないかと推測される。この玄関廻りの設計は、しかしその後大きく変更されることになる。



図3 日本劇場



図4 ストックホルム特許局

構造学を得意とする小場への手紙には、スケッチの右下に「日劇のやうなドライエリアの手法」との書き込みがある⁷⁾。日劇とは千代田区有楽町に建設され親しまれた地上7階、地下3階建の日本劇場（1933）（図3）の通称である。歴史主義建築における様式を残しながら新しいスタイルに挑み続けた建築家渡辺仁（1887～1973）による設計で、外観ファサードは緩やかにカーブし、内装にアール・デコ調のデザインが取り入れられた。立原はそのドライエリアに注目している。つまり地階を備えた規模の大きい図書館を想定していたため、地下の快適な環境を保持する機能を日劇のそれに倣おうと意欲的であったと考えられる。図1において、もう一点注視したいのは、建物の下に記された平面図らしきラフスケッチである。矩形の下部には突出した四角い部分にベランダと書き込まれている。また6つの「R」の書き込みは「roof」を、「×印」は屋根のない部分、即ち中庭と推測することができ、この時点においてバルコニーのある、日の字型プランの図書館が考案されていたということになる。また「休憩関係」の書き込みは、のちの食堂、喫茶室、屋上庭園のエリアに繋がっていくと見られ、これらのことから、書簡のラフスケッチのなかに、既に周到な平面計画が練られていたことが理解できる。

神保へのスケッチ（図2）は、小場へのそれと比較すると、バルコニーの形状や設置のされかた、階段、窓、鐘塔の長さに相違が見られる。また、正面ファサードの前に通路、庭、植栽など外構が描き込まれ、詩人に宛てた手紙らしく挿絵のようなタッチで彩色もされている。

以上のように、一兩日のあいだにも、書簡のスケッチにみる設計プランにはいくつかの変更点がある。立原は「図書館」設計図への湧き上がるアイデアを、その都度、気心の知れた友人に向けて発信することで、イメージの更新を行っていたのではないだろうか。ともあれ、これらの書簡に添えられたスケッチは初期構想の原点と考えてよいだろう。そこで本稿においては、これらのスケッチを〈初期スケッチ〉と称し、「図書館」が設計される経緯を把握するうえでの分析に役立てたい。

3. 都市公園と近代の図書館像

3-1. 〈図書館草稿〉における諸室配置

〈初期スケッチ〉の他にも、図書館に関するスケッチはいくらか現存する。館内の諸室配置と平面のラフスケッチが記された1枚の紙片（図5）^{8）}は、記載時期が不明ではあるが、〈初期スケッチ〉後の草稿と推定され、本稿では〈図書館草稿〉と仮称し、分析対象としたい。それによると、配置計画は「一二階」と「地階」に大別され、1～2階エリアは3区分から構成されている。その上段には「受付」、「館長室」、「会議室」、また「研究室」などの部屋が挙げられている。中段には「書庫」、「目録室」、「貸出室」や7種類の閲覧室が列挙され、注目すべきは「子供用小集会室」が計画されている点である。この集会室案が、後の「子供のためのオーディトリウム」案に発展すると考えられる。「食堂」、「喫茶室」、「喫煙室」などの寛ぎのためのスペースは、小場宛書簡に記されていた「休憩関係」の構想が引き継がれていると見てよいだろう。下段には「オーディトリウム（1000人位）、入口、出札室」の記載があり、図書館の配置上で特別な扱いであることが分かる。更に、「地階」エリアには従業員の部屋や食堂、および館内での印刷製本に関する設備等が集約され計画されている。地下1階の設計構想は小場宛書簡における地下環境の配慮のための「ドライエリア」案が継続して思案されている裏付けといえる。この後、最終案では「図書館」は3階建に設計されるが、諸室配置は概ね本草稿案に近く、とりわけ地階に関しては本案が殆ど組み込まれている。



図5 草稿案（文字部分「一二階」の諸室配置は上段・中段・下段の3ブロックから成っている）

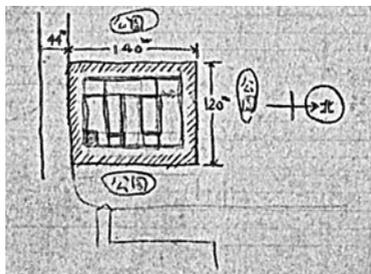


図6 左図版の下図を拡大

3-2. 〈図書館草稿〉における立地案

次に〈図書館草稿〉のラフスケッチ（図6）を見て行きたい。5000坪余り（120m×140m）の広大な敷地の南面は「44m」の幅広の道路に接し、東・北・西はそれぞれ「公園」に面して、斜線部分を除く内側が建物（図書館）の敷地を示している。それを〈初期スケッチ〉の小場宛の平面図（図1）と照合してみると、近似している点が浮かび上がる。中央の5つ並列する矩形のうちの2番目と4番目（小場スケッチでは×印の箇所）は中庭を示し、建物は両中庭を囲む日の字型プランとして設計され、中庭を二分する中央部は、のちの設計図から推測するならば大閲覧室であろう。ただし小場宛では、エントランスの突出したバルコニーに主眼が置かれているが、図6ではバルコニーは削除され、壁面はフラットに変更されている。

ところで5000坪余りの敷地が計画された意図は、国立の図書館が想定されていることに依ると考えられる。本構想が国立図書館案である証左は「図書館設計図7」に基づくことを確認しておきたい。その図面の左下に「国立図書館設計案／詳細圖／書架詳細」という書き込みが見られる。設計図は9枚制作され、その全てに茶色の用紙で「図書館設計図（番号入）」と手書きされたキャプションが貼付されている。設計図の7枚目にのみ、キャプションに加え、図面の傍らに旧漢字で「国立図書館」と書き込まれていることには——散文や書簡に散見されるような、立原らしい茶目を感じられもするが——既存の帝国図書館を意識しながらも、独創的な国立図書館の設計に意欲的であったことが察せられる。広々とした敷地と幅広の道路沿いに計画されている点においても、それは都市の中心に構想されているものと解される。

戦前の東京中心部の道路網計画を調べてみると、明治から大正にかけて整備が繰り返された幹線道路は、1923年の関東大震災により再度見直しを余儀なくされ、帝都復興院による東西・南北を基軸とする道路網が計画された経緯がある。文献によると、当初は震災復興事業としての壮大な道路計画であったが、様々な政争等によって規模は縮小され、最終的には1930年3月、

南北方向は44m（現在の昭和通）、東西方向は36m（現在の靖国通）の幹線道路で完成された。「図書館」の立地を想定するうえで、立原の念頭には明治から昭和初期にかけての複数回に及ぶ近代的広幅員道路の整備計画への了見があったのではないか。草稿案に「44m」と明記したことは幹線道路、もしくはそれに準じる道路沿いの図書館をイメージしていたと考えられる。また図6の平面図では、敷地の三方は「公園」に面していると記され、「図書館」は広大な公園内に構想されていると理解できる。当時の都市公園は、明治維新後の急速な近代化によって社寺境内地が土地利用され、上野、芝、深川に代表されるような近代的な公園が整備され始めたことが端緒としてあり、さらに関東大震災を契機として震災復興公園が数多く創設されていった。そうした経緯を辿り、昭和初期における東京の公園は、都市化して行く街の人々の集いの場としての機能を発揮することとなる。立原はそうした点にも意識的であったと考えられる。

3-3. 近代的な図書館の3つの事例

首都東京市では明治後期から昭和にかけての近代化の波によって、図書館の整備は急速に進展し、30年代末には公立図書館が大小合わせて28館を数えるほどに普及した。1908年、東京市立の初めての図書館として誕生した日比谷図書館と翌年に開館した深川図書館は、都市生活のための文化的施設の需要に応え、日比谷公園と深川公園という規模の大きな公園のなかに建設されている。次に、立原の〈図書館草稿〉との共通の立地条件、即ち「公園」のなかの図書館というキーワードをもとに、両図書館および上野の帝国図書館を取り上げ、「図書館」構想との接点を探っておきたい。

日比谷図書館はアール・ヌーボー様式の木造2階建の建築で、玄関を入ると正面の図書出納室の奥は煉瓦建4層構造の書庫となっていた。1階には新聞雑誌室70席、児童閲覧室32席、婦人閲覧室36席、2階に上がると大閲覧室240席、特別閲覧室32席があり、開館時に4万8100冊の蔵書があった。先例のなかった児童閲覧室が備わっていることで児童の来館者も多く、様々な

職種の人々で連日満員の盛況ぶりであったと記録されている。日比谷図書館は関東大震災で甚大な被害を受けたが、後に修復され、戦災で焼失されるまで使用されていたため、立原が知るのは初代の建物ということになる。

永代寺の跡地である深川公園の西南を整地し建設された深川図書館は、壁面にドリス式オーダーの柱が装飾された外観をもつ図書館であったが、関東大震災で被災したことにより、1928年に清澄庭園に移転し新築された。2代目の図書館は鉄筋3階建てで、その内部はアーチの装飾や丸柱などアール・デコによるデザインで造形されている。深川図書館の特徴は1階部分にあり、玄関入ると100席の新聞雑誌閲覧室、開架式帯出図書室が配置されており、70席の閲覧席が用意された児童室には5000冊の児童図書が開架され、毎月恒例の童話会や夏期児童文庫などの催しも行われ大盛況であったという。2階には婦人室、また2階と3階には大閲覧室があり、清澄庭園の景観が眺められる屋上庭園も整備されており、地元の商工業者をはじめ婦人も数多く来館し賑わいを見せていた。後述する立原の「図書館」設計図においても子供のための諸室、2カ所の大閲覧室、屋上庭園などが計画されるなどの共通点が見られ、深川図書館は立原の「図書館」構想の基本的なコンセプトの規範を成していると考えられる。

図書館の立地が公園に隣接するという点においては、1906年から上野公園の北に位置する帝国図書館にも触れておきたい。1899年の帝国図書館計画案では書籍120万冊、閲覧室730席、延床面積20,000㎡の概要が示され、当初の全体計画では、地下1階、地上3階の中庭を囲む口の字形の構造で、南側正面の街路から2階へと大階段が続く古典主義様式の建築が計画されていた。外壁は三層構成のルネサンス様式の意匠をもち、屋根は天然スレート一文字葺きで、室内装飾にも随所にルネサンス風の意匠が配された。しかし壮大な建築計画が立案されながらも大幅な予算の削減により、着工後20数年を経過し、1929年に竣工となった建築は全体像の4分の1程度に過ぎず、以降も初期の建設計画が実現されることはなかった。立原が土地の歴史的背景と建物の関係に関心を持っていることを考えると、建築家として複雑な気持ちを抱いたであろうことは、直接の言及はなくとも、彼が執筆した文章や

建築思考から少なからず察することは出来る。この未実現の平面計画を見ると、正面の長さが約87.5mのエントランス部分は、〈図書館草稿〉のラフスケッチの建物とほぼ同等であるうえ、初期のバルコニー案も重ねて考えると、仮に立原が帝国図書館の設計図を閲覧し、その全体構想を知り得たとした時、その未完の設計図に影響を受け、尚且つ帝国図書館とは異なる多様な機能を備え、広く市民に開かれた中央図書館の典型を日比谷や深川の図書館に見出し、自身の設計案に反映させたのではないかと思われる。

4. 「図書館」設計図における分析と考察

4-1. 外観透視図にみる「ストックホルム市庁舎」との対照

設計課題「図書館」の構想過程において、〈初期スケッチ〉は立原の公共建築観が表れた様式建築の要素が色濃く見られるものであり、〈図書館草稿〉に記された諸室案や平面のラフスケッチには、都市公園に計画される多機能な図書館の姿が浮かび上がった。それらをもとに、本章では〈最終案〉として提出された「図書館」設計図の分析を試みる。全9枚の図面は、外観透視図、地階～3階の各階平面図、立面図と断面図、書架の詳細図、正面大階段および閲覧室の室内透視図から成っている。方位は明記されていないが、1階平面図（図11、13）の右下に鉛筆で極薄く「44m」と記されていることから、草稿の立地案が継続しているとし、正面ファサードは南面と推定できる。

では、「図書館」の外観透視図（図7）をその着想源とされるストックホルム市庁舎（以下、市庁舎）（図8）の写真を見比べるところから始めたい。両建築を比較して見ると、確かに遠景からの外観は似ている印象がある。ファサード両端に設置された大小の塔、1階アーケードの連続するアーチや、全体として縦長窓が多用された縦ラインの強調などは類似している点と言える。しかし両図を凝視してみると、屋根の形状——市庁舎は急勾配の切妻屋根であるが、「図書館」はフラットルーフ——や塔の数、鐘塔の詳細等には明らかな差異が確認できる。



図7 「図書館設計図1」：外観透視図



図8 ストックホルム市庁舎

さらに市庁舎のデザインを丹念に調べてみると、「図書館」には市庁舎に特徴的な外壁細部のモニュメントや意匠が見られないことから、立原の小場宛への手紙に書かれた想いとは隔たった、つまりエストベリの設計思考とは明らかに異なる設計へ向かっていったと解せられる。最も重視しなければならない点は立地上の相違である。市庁舎は三方がメーラレン湖に面し、鐘塔は東南角に位置しているのに対して、「図書館」は三方が公園で鐘塔は西南角に計画されている。市庁舎は水の都ストックホルムに相応しく、水辺という敷地に建てられた点に意味があり、仔細に見れば、外観様式はベニス・ゴシックを基調に北欧や東洋の要素が織り込まれた魅力ある意匠となっている。では、立原は市庁舎の何を規範としたのか。また、自身の「図書館」設計を通して如何なる建築思考を試みようとしたのか。まずは「図書館」設計図の様相を詳細に読解することから始めたい。

4-2. 立面図にみる意匠の多様性

外観透視図の手前に聳える高塔から小塔へ向けての壁面、即ち正面ファサードは、立面図では図9の上段に描かれている。透視図で見る限り縦長窓が目目を引くが、立面図では最上階の横連窓が際立ち、またその水平線と対比をなすような入口の僅かなアーチが印象的である。つまり大小の鐘塔に挟まれた正面ファサードは、縦長窓・横連窓・アーチの曲線で構成された表情豊かな壁面としてデザインされ、メインエントランスの華やぎが見てとれる。

「図書館」の設計図に立原の「強い意図」を洞察している建築家鈴木了二は、著書において「立面図で顕著にみられるクラシックな縦長窓と近代的な横長窓との混在」を指摘し、「様式や時代の一貫性を、立原はあえてはずしつけているのではないだろうか」と鋭い問いを投げかけている⁹⁾。鈴木は、各立面図に見られる一貫性の欠如について否定的なのではなく、その特異さを次のように解説している。例えば、図9上段の立面は「古風で優雅な塔と近代的な水平のスカイラインをもつ屋根との組み合わせ」、¹⁰⁾ 図9中段は「ストイックな表情」¹¹⁾、図10上段は「新古典主義風の細い垂直窓の連続する面」と「巨大で空虚な壁」の取り合わせ¹²⁾、そして図10中段は「ラテン的で祝祭的な(…)雰囲気」として¹³⁾、各外壁が「窓の表情の多様さやリズムの違いによって性格が異なる」と述べている¹⁴⁾。鈴木が外壁の意匠をデザインとしてだけでなく、「表情」、「性格」と捉えた観点は、建築と人間の関係性を重んじる立原の建築理念にも通じる解釈であるように思われる。筆者は、更に4つの外壁の意匠と平面計画の諸室配置に関連性が見られないか、立面図(図9、10)と平面図(図11、12)を照らし合わせて見て行きたい。

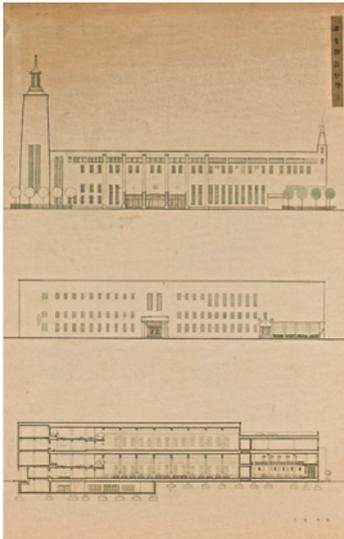


図9 「図書館設計図5」
立面図(上中)、断面図(下)

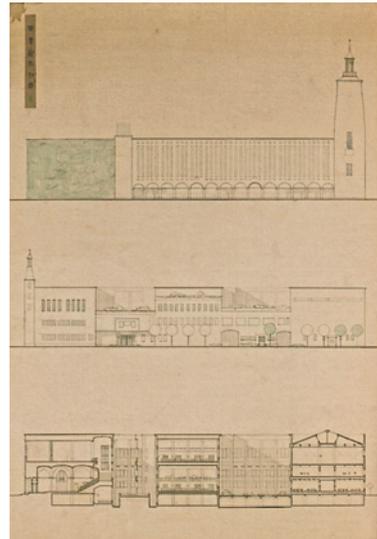


図10 「図書館設計図6」
立面図(上中)、断面図(下)

「図書館」の正面ファサードの多彩な外観意匠（図9上段）は、エントランスに出入りする人々の賑わいのメタファーと映るが、その反対の方角に位置する外壁（図9中段）は、一転して理性的な意匠となっている。1階平面図（図11、13）を見ると、特別閲覧室、オーディトリウム、その上階には研究室、美術品陳列室、地図図表陳列室などの学術的な情報を得る諸室があり、外観意匠はそれらを反映しているかのようだ。スリット窓と連続アーチによって厳粛な美しさを演出している外壁（図10上段）のエリアは、図書館に必須の目録室、貸出室、標本展示室などが集結したゾーンで、それらの整肅さが外壁にデザイン化されていると見る事が出来る。小塔を備えた壁面（図10中段）は、街路から屋上庭園の緑や、壁を飾る蔦の葉が見え、快活で起伏に富んだ印象である。このエリアの1階には子供のためのオーディトリウムや閲覧室があり、2階には食堂、3階には喫茶室や屋上庭園が配されている。

このように、「図書館」の4つのファサードの多彩な意匠の混在は、諸室の多様性が現れていると見る事ができ、新しい時代の「図書館」イメージを示唆しているものと考えられる。

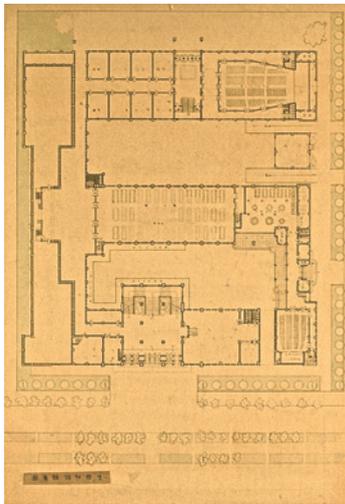


図11 「図書館設計図2」より1階平面図

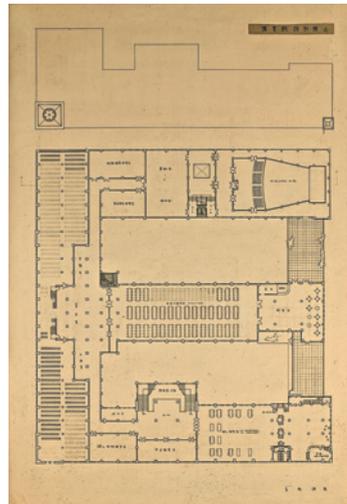


図12 「図書館設計図4」より3階平面図

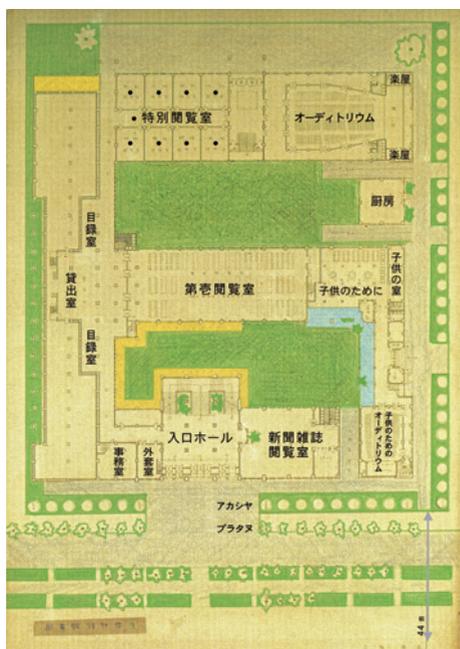


図13 「図書館設計図2」より1階平面図（加筆版）

- 左図は、1階平面図（図11）において、立原が書き添している諸室の名称を読みやすく表示するため、筆者が要所のみを加筆・着色したものである。
- 本建築には、複数の出入口がある。1階には、子供対象の諸室が充実しており、児童室（「子供のために」と表記されている）に隣接して「貸出室」、「水呑場」も設計されている。
- 植栽としては、「アカシヤ」、「プラタナス」（＝ブラタナス）が指定されている。また正面玄関前の道幅は「44m」と記載されている。尚、立原の図面の書き込みを元に、筆者によりドライエリアは黄色、ベランダは水色で示した。

4-3. 平面図にみる寛ぎの空間の創出

「図書館」の全体計画は中庭を二分した日の字型プランである。中庭に面した中央部は1階が第巻閲覧室、2階は吹き抜けで、3階は「522人収容」と明記された第弐大閲覧室となっている（図15）。当初構想されていた入口部分と中央部が直結した設計は変更され、1階平面図（図11、13）に見られるように、大通りに面した入口及びエントランスホールと大階段を一体とし、その大階段を中庭へ向けて突出させることによって、ゆとりある空間を持つ折り返し階段が生まれたと解釈することが出来る（図14）。この折り返し階段は、諸室との動線が考慮される以上に、最初期に思案されたバルコニーに代替する機能を踊り場のスペースに付加することで、来館者が一息入れて中庭の景色を眺められる場所の設計を重視したものと考えられる。

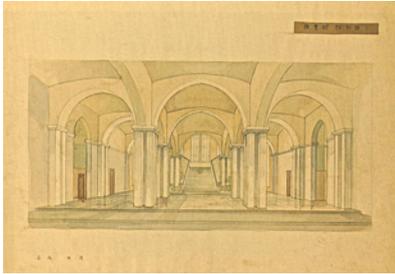


図14 「図書館設計図8」 エントランスホール

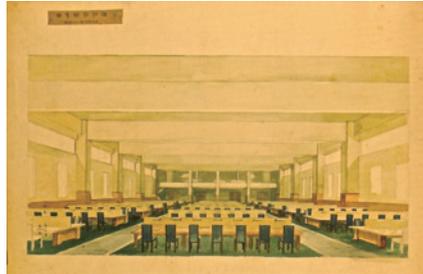


図15 「図書館設計図9止」 大閲覧室

館内に自然を取り込む設計は3階の屋上庭園にも活かされ、その発想には、正面ファサードの横連窓などとともに、コルビュジエからの影響を見ることが出来る。また先述したように、深川図書館の屋上庭園は広く認知されていた。だが本設計の注目すべき点は、3階の平面計画における屋上庭園の配置にある（図12）。3階には第式大閲覧室に続く喫茶室があり、丸テーブルのどの席からも外の景色が愉しめる設計となっている。その喫茶室からは屋上庭園へ出ることができ、また同階の婦人閲覧室の扉からも屋上庭園に出て行けるというように、寛ぎの空間を共有できるための間取りが配慮されている。利用者の目線に立ち、大閲覧室、喫茶室、屋上庭園、婦人閲覧室の動線を機能的に繋げる発想は、「図書館」に憩いの場としての意味を付加している点においても、先進的であると評価できるであろう。立原は当初より設計計画に「休憩関係」を重視してきた。そのコンセプトは1階の水呑場、2階の喫煙室、休憩室、食堂、3階の喫茶室、屋上庭園に実現されているといえる。当時の図書館には休憩室や喫煙室はあったが、喫茶室が併設されている館はなかった。屋上庭園の眺めを取りこんだ喫茶室があり、随所に観葉植物が配される立原の図書館構想は、昭和初期の時代に、いかにモダンで斬新なプランであったかを知るとともに、現代の図書館の先駆けと見ることも出来るであろう。

4-4. オーディトリウムのある図書館

本設計図にみる最大の特徴は、大小のオーディトリウムが併設されている

点にある¹⁵⁾平面図（図11、13）を見ると、小塔に程近い入口をはいり、右側が子供の閲覧室、左側に進むと「子供のためのオーデトリウム」という配置になっている。1930年代、東京の市立図書館では集会室を利用して子供対象の企画を催すことはあったものの、児童向けのオーデトリウムを備えている図書館は、言うまでもなく皆無であった。だが社会状況としては、1918年に芥川龍之介、有島武郎、泉鏡花、北原白秋らが賛同の意を表明した童話童謡雑誌『赤い鳥』が創刊されて以降、各地で子供向け音楽会の開催が盛んとなった。その童謡運動の高まりを牽引したのが、立原の敬慕する作家、詩人、画家たちであったことは、児童用のホールを設計する意識を高めたと思われる。同時期に自身の物語「春のごろつき」を紙芝居用の挿絵としてイメージスケッチしていたことや¹⁶⁾当時の図書館の児童向け企画の運営等を考え合わせると、オーデトリウムの構想には、音楽会に限らず童話や物語の朗読や演劇会など様々な企画に対応可能なホールを想定していたと考えられる。

もう一つの「オーデトリウム」は、〈図書館草稿〉において「1000人」程度の収容を想定していた一般用の大ホールである。1階には扇型形式の客席、舞台、楽屋が配され、上階にはバルコニー席も設けられている。1936年頃は、西洋の音楽が浸透し大学生らはコンサートに出掛け、度々レコードを聴く機会もあった。当時、既に日比谷公園内には建築家佐藤功一（1878～1941）の設計による鉄筋コンクリート造4階建の日比谷公会堂（1929）が、座席数2074を備えた公共ホールとして建設されていた。日比谷公会堂は、東京を近代国家に相応の都市に再生させるためのプランとして「言論・文化の拠点となる多目的ホール」を目指したものであったが¹⁷⁾その頃は音楽会に適するホールが少なかったため¹⁸⁾オーケストラ演奏会やリサイタルがしばしば開催されていた。立原の1936年の書簡を読むと、日比谷公会堂でのコンサートのことが綴られている。例えば京都の親友への手紙には「先夜、リレイ・クラウスとゴオルトベルクの演奏で、クロイツエルソナタをきき、(…)明夜、フオイアマンがバツハやモツアルトやストラヴィンスキイを奏きます」とあ

る。¹⁹⁾ 3月から5月にかけての書簡に音楽の話題が多いことや同時期の書簡に大学院で劇場建築や建築音響学を研究していた市浦健（1904～1981）の名が何度か登場することを考え合わせると、この期に音響への関心が一気に高まっていたことは確かである。

以上のように、オーデトリアムの設計意図は西洋音楽への憧憬と建築家としての音楽ホール建設の意欲に依るものと言えるが、同時に詩人の感性として、オーデトリウムという言葉が持つ外来語の音の響きや語意に発想を得たことが考えられる。立原が毎夏を過ごした軽井沢には、「オーデトリウム通り」と称される道がある。その所以は、ヴォーリズ（1880～1964）設計の「軽井沢ユニオン・チャーチ」（1918）²⁰⁾が礼拝だけでなく集会や音楽会、講演会等に使用されることから「オーデトリウム」と呼ばれ、教会に至る道もそのように名付けられたことによる。元来、オーデトリウムという言葉には聴衆を収容する空間というだけでなく、古代ギリシアの時代から受け継がれ育まれてきた〈集い〉とそこに生まれる〈芸術〉の場としての意味がある。大学時代に立原が軽井沢の地から西欧の文化や芸術を学び、多くのインスピレーションを得てきた事実を知るとき、音楽堂ではなく寧ろ教会がオーデトリウムとして親しまれている姿は、建築と人間との関係性を建築思考の基盤とする立原にとっては、重要な着想源となり得たと考えられる。

5. おわりに一塔のある風景

前章の立面図分析では、図書館の外壁は館内の諸室の多様性を外部に表出しているかのように、4面それぞれが様式にとらわれない個性的な外観意匠であることに触れた。ここでもう一つの私見として、図に描かれた「塔」を扱った所に各壁面を音の意匠という観点から着目しておきたい。例えば大小の「ふたつの塔」が描かれた正面ファサードの立面（図9上段）は、複数の鐘が奏でるポリフォニックな世界が表現されている。「大きな鐘塔」のある壁面（図10上段）では音の波の形作る振幅が連続アーチによって軽やかに図

示され、鐘塔から隔たった薄緑の壁面に至ると音が休止した、無音の意匠となる。また、尖り屋根の`小塔、のある壁面（図10中段）は明るく弾けるような音のハーモニーが、塔から遠のくにつれて微細な振動となり、`塔のない、壁面（図9中段）では静穏ななかに透明感のある音の模様が刻まれているかに映る。——そのような空想をさせるほど、「図書館」外壁の意匠は、鐘の音をモチーフとし、視覚化することによって、その音の風景が壁面に一つのコンポジション、抽象絵画を生み出しているように見える。立原は、しかしながら洋行経験がなく実際に欧州の鐘の音を聴いた事がない。²¹⁾立原の音の抽象化が幾分シンプルであるのは、日常的に彼が馴染んでいた撞鐘——身近なところでは上野公園・寛永寺「時の鐘」——の音が原型としてあるからなのかもしれない。

再び外観透視図（図7）に目を向けると、水彩で仕上げられた独特の雰囲気をもつパースペクティブにおいて、構造体としての建築以上に存在感を放っているのは、精確に影の陰影まで付けた鐘塔の描写であり、その部分にこそ設計者の指向するリアリティの所在が見てとれる。彼の立面図が鐘の音色を具体的な形に翻案するように、透視図の淡彩は鐘の響きの絵画表現であり、音を内在させた`塔の象徴性、を本構想のもうひとつの意図として図示する試みであったように思われる。

「図書館」設計は、課題の設計制作であるが故に、かえって理想の国立図書館として描かれたと言ってもよいだろう。その根底にあるのは、一つには1906年に国家的事業として壮大な計画が立てられながらも、23年後に当初の構想が未実現のまま完成とされた帝国図書館への複雑な心境であると思われる。もう一つには、1902年にエストベリによって設計が着手され1923年に竣工されるまで、やはり多大な時間が費やされながらも建築家と工芸美術家の精魂が傾けられ誕生したストックホルム市庁舎の、記念碑的でありながら市民に親しまれる建築への憧憬であると察せられる。立原の構想した「図書館」では、着想源としての市庁舎の北欧浪漫主義的な意匠は近代建築の手法に大胆に組み替えられたが、そうすることで市庁舎の芸術性の高さに畏敬

の念を表すとともに、立原の考えるところの時代感覚を設計に活かしたのだと言えるだろう。そして市庁舎から継承した鐘塔の存在には、時を告げるという機能のなかに、建築の日常性と永遠性を託したと読むことが出来る。「図書館」の外観透視図に織り込まれたその詩的感性は、〈天上〉と〈地上〉を結ぶイメージをもつ鐘塔に象徴され、立原の冒頭の詩篇「虹の輪」の〈少女の天使〉と〈おまへ／僕〉のモチーフとも通じ合うところがある。

現実的視点に立ち戻れば、「図書館」設計の過程における敷地、道路、街路樹の選定などから、立原が実際の建設候補地をいくつか想定していたことは想像に難くない。しかし立地場所を特定することは本稿の目的ではない。「図書館」構想に向けて、自身の公共建築への視座を確認することから始まり、限りなく実現可能性を持った計画案として設計しながらも、最終的にはアンビルトの前提ゆえに壮大な未来の図書館像を描けたことに、立原の純粋な建築思考が立ち現れていると理解できるからだ。その理想のかたちとは、子供から大人まで幅広い層の人々が心置きなく読書を楽しみ、調査や研究に没頭できる図書館であり、美術や標本の展示室が備えられ、またオーデトリウムにおいては音楽や演劇などの鑑賞ができ、喫茶や食堂などの寛ぎと休息のための空間も準備されている多機能な複合施設である。そしてその図書館の象徴的存在である鐘は、街行く人々に時を告げ、近隣の人々の生活に浸透してゆく。見方を変えれば、風の如く、目には見えない〈時鐘〉を支える存在が〈建築〉であるということもできるだろう。そうした立原の公共建築への志向性は、建築と人間の関係性を設計思考の礎としているところから芽生えたものであると言える。そこには本来の詩人的感性とともに合理主義的な建築思考だけでは生まれえない、人に寄り添う建築の姿を、図面を引くことで思考する若い建築家の姿がある。

[注]

- 1) 「プレリュード」という言葉は、或る少女との別れを書いた手紙（1936年7月11日、猪野宛）にも記述があり、この時期の立原にとって、音楽・詩・建築の

領域を越えて創作イメージの広がる言葉であった。

- 2) 田中一三宛書簡(1936年4月22日)。『立原道造全集5』(筑摩書房)、p.219.
- 3) 「建築計画及び設計製図」より。『立原道造全集4』(筑摩書房)、p.515.
- 4) 1936年7月『建築』再刊第1号。『立原道造全集4』(筑摩書房)、p.200～205.
- 5) 『立原道造全集4』(筑摩書房)、p.587.
- 6) 柴岡宛図版は全集には未収録。[編註・建築物の墨絵あり]とのみ記載。尚、柴岡宛と小場宛書簡は『立原道造全集5』(筑摩書房)、p.230. 神保宛書簡は『同』p.231.
- 7) ドライエリアは、地下室の環境(採光、防湿、通風、閉塞感、避難経路)改善のために、建築物の外壁に沿って掘り下げられた空間のこと。
- 8) 『立原道造全集4』(筑摩書房)、p.24. 「[図書館]」1-4より1を掲載。
- 9) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.31.より。
- 10) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.31.より。
- 11) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.34.より。
- 12) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.33.より。
- 13) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.34.より。
- 14) 鈴木了二『寝そべる建築』(みすず書房)、p.33.より。
- 15) オーディトリウムは、音楽堂、劇場、講堂、公会堂など、多くの聴衆を収容する屋内空間を指す。立原は「オーディトリウム」と表記している。
- 16) 『立原道造全集4』(筑摩書房)、口絵p.62.
- 17) 鈴木博之他『都市の記憶Ⅲ 日本のクラシックホール』(白揚舎)、p.82.
- 18) 日本初の本格的音楽専用ホールは、1954年竣工の神奈川県立音楽堂となる。
- 19) 田中一三宛書簡(1936年4月22日)。『立原道造全集5』(筑摩書房)、p.219.
- 20) 1987年に宣教師ダニエル・ノルマンによって宗派を越えた教会として創立。
- 21) 立原が敬愛する建築家吉田鉄郎(1894～1956)は、1931年にストックホルム市庁舎を巡視した際、市庁舎の鐘が、その正午の時鐘の前に「牧歌的な旋律で一曲」の音楽が流れたことを後に回想している。立原もあるいは吉田の講演会等でそのような話を聞いていた可能性はあるかもしれない。

[図版出典]

- 図1、2 『立原道造全集4』(筑摩書房)、口絵 p.27.
- 図3 藤井恵介・角田真弓編『明治大正昭和 建築写真聚覧』(文生書院)、p.334.
- 図4 吉田鉄郎『スウェーデンの建築家』(彰国社)、p.27.
- 図5、6 『立原道造全集4』(筑摩書房)、p.24.

- 図 7 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.22.
 図 8 吉田鉄郎『スウェーデンの建築家』(彰国社)、p.40.
 図 9 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.24.
 図 10 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.25.
 図 11 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.23.
 図 12 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.24.
 図 13 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.23.(加筆版)
 図 14、15 『立原道造全集 4』(筑摩書房)、口絵 p.26.

[参考文献]

- 堀江興「東京の戦災復興計画と幻の百メートル道路」国際交通安全学会誌
 Vol.23, No.4、1997年12月22日。
 佐藤政孝『東京の近代図書館史』新風舎、1998年。
 『深川図書館100年のあゆみ』江東区教育委員会、2009年。
 坂本勝比古「旧帝国図書館の歴史的考察」、『国際子ども図書館事業記録集 明治の
 煉瓦建築「旧帝国図書館」の保存と再生』国土交通省関東地方整備局営繕部、
 2002年。
 塚野路哉・千代章一郎「日本近代建築における屋上庭園—明治期から第二次世界大
 戦終戦まで—」日本感性工学会論文誌 Vol.13, No.1(特集号)、pp.127-135(2014
 年)。
 葉口英子「明治・大正期にみる子どもに関する音楽会」環境と経営 第21巻第2号
 (2015年)。
 河原泰「わが国における公共ホールの変遷(前編)」Arts Policy & Management
 No.15、2002年4月。

謝辞：本稿の図書館設計図を読解するにあたり、立原道造記念会より「図書館設計図2」、「図書館設計図3」、「図書館設計図4」の画像データをお借りしました。ここに記し、深く感謝いたします。

(大学院修士課程修了)

SUMMARY

Michizo Tachihara—A Library with a Bell Tower:
A Novel Architectural Pursuit Found in 9 Design Drawings

Toshiko OKAMOTO

Michizo Tachihara learned architecture at Tokyo University around in the middle of 1930's. He was a promising student, who was also a poet. He wrote poems as designing buildings, and designed buildings as writing poems. In those days, Modernism was the focus of attention in Japanese architecture. Tachihara, however, pursued the design which was highly functional, but at the same time allowed people to have a relaxed, quality time. In this thesis, examination and analysis were conducted on Tachihara's design concept based on three kinds of materials. The first material is the sketches sent to his friends in his letters, the second is rough drafts. The third is nine completed design drawings. As Tachihara himself made it clear the library design was inspired by Northern-style architecture, more precisely, by The Stockholm City Hall. His library shares a lot of common features with the Stockholm City Hall. However, there are also differences. According to the floor plan, the library faces the main street and has three stories with one basement floor. There is a courtyard inside and, in its center, there are two reading rooms, each for 500 people. One of them is located on the first floor, and the other on the third floor. There is also one reading room for women only and one reading room for children and a research room. Each room is so designed as to allow a comfortable amount of sunlight to come in. As a novel feature, there is a tea room on the third floor, which allows direct access to the rooftop garden. This shows that Tachihara paid special attention to making the library a comfortable and relaxing place for the users. Another novel feature is two auditoriums, one for adults and the other for children. The former has a capacity for the audience of 1000. The library also has a bell tower, which no other library in those days had. The sounds of a bell tower travel far beyond the library's premises into the city area. This fact may show Tachihara's intention to make the library part of the city life, not just an isolated physical entity. All facts mentioned above indicate that Tachihara pursued a harmony of a functional perspective and a humanistic perspective in his architectural design.